大成建設
×
LIXIL

タイル壁面で街区に統一感をもたらす「なんばパークス サウス」の建築デザイン

大成建設株式会社

難波中二丁目開発計画エリアに竣工した3棟のビルは、低層部に共通するタイルを使い、街区全体の統一感を図っている

2023年7月1日、大阪ミナミ・なんばパークス南側の再開発エリアに「なんばパークス サウス」がグランドオープンしました。時間貸駐車場として利用されていた敷地面積約9,000㎡の土地に、センタラ ホテルズ&リゾーツ・大成建設・関電不動産開発・南海電気鉄道による難波中二丁目開発計画がスタート。大阪市内のターミナル拠点開発では梅田の再開発に次ぐ規模といわれるこの再開発では、2つのホテルやオフィス、駐車場からなる3棟のビルを歩行者デッキでつなぎ、隣接する商業施設「なんばパークス」と連携した一体的な街づくりを目指しました。
ここでは、3棟の建築設計を担った大成建設設計部の皆さんに、外装デザインの重要な要素として使用いただいたLIXILのタイルを中心に、建物のデザインコンセプトや、素材としてのタイルの魅力についてお話をいただきました。

参加者（敬称略）
■大成建設株式会社
塩谷尚斉氏（設計本部 建築設計第一部 部長）
中野弥氏（設計本部 建築設計第一部 シニア・アーキテクト）
丹下幸太氏（設計本部 建築設計第一部 プロジェクト・アーキテクト）

難波中二丁目開発計画の概要

開発計画の概要をお聞かせください。

塩谷氏：今回の計画は、株式会社ニッピ様が所有する駐車場だった敷地を3分割して、定期借地権を設け、それぞれの事業主様の要望に応じた建物を建てるというかたちでスタートしました。
一番大きなA敷地には、タイを代表する高級ホテルチェーン「センタラ ホテルズ&リゾーツ」が日本に進出したいという情報を得て、我々がタイに乗り込み直接交渉したところ、この開発計画を非常に気に入っていただき、とんとん拍子で話が進みました。日本初上陸となる「センタラグランドホテル大阪」は、約150mの超高層で、特徴あるインテリアデザインを売りにしたレストラン&ルーフトップバーを最上階に設けた客室数515室のホテルです。
次にC敷地では、なんばエリアの根強い観光需要を捉え、建物ボリュームを抑えてA敷地ホテルとの住み分けができるホテルを計画しました。ホテル京阪様がライフスタイル型ホテルの開発を展開したいということで、227室の「ホテル京阪 なんばグランデ」が実現しました。
最後にB敷地は、従前からの駐車場需要と一定のニーズが見込めるオフィスビルの構成で南海電気鉄道株式会社様が開発され、一般貸駐車場を間に挟んだ14階建てのオフィスビル「パークス サウス スクエア」が完成しました。

塩谷尚斉氏
大成建設株式会社
設計本部
建築設計第一部 部長

この計画は高容積率を獲得する都市再生特区制度を採用していないため、街区整備に対する法的縛りが緩やかであり、A、B、C敷地それぞれの事業者の思いを形にしていくプロセスは比較的スムーズに進みましたが、逆に強い都市計画的規制がないため、設計者としては街としてのつながりや全体感が欠落しないよう常に意識して各計画を進めました。幸い計画地の北側には大阪球場の跡地にできた「なんばパークス」という素晴らしい複合商業施設があり、その緑と賑わいを意識しつつ、当街区も全体の統一感を持たせた街づくりをしたいという提案をさせていただいたところ、各事業者様よりご賛同いただき、低層部や歩行者空間は統一性を持たせたデザインにより建物同士の連携を深めていくことになりました。

6 難波中二丁目開発地の西側にあるLABI1なんば（ヤマダデンキ）との間にあるペデストリアンデッキ（2F）からの眺め。北隣りにある印象的な壁面の「なんばパークス」が、景観の一部を構成していることがわかる

低層部にタイルを用いた理由

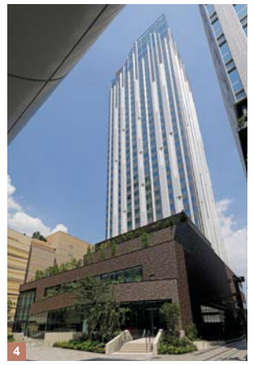
タイルの壁面が非常に印象的ですが、どんな意図がありますか。

塩谷氏：大阪のまちを歩くとわかりますが、タイルを使った建物が多いことに気付きます。その使い方はさまざまに工夫されており、大阪の街の近代化や歴史観を象徴するものと言えます。また、隣接する「なんばパークス」は2003〜2007年にかけて竣工した施設で、大峡谷をイメージした特徴的な外観デザインになっており、低層壁面は地層を模したデザインになっています。2014年アメリカCNNの「世界で最も美しい空中庭園トップ10」に選出されるなど、大変話題になりました。
そこで今回、新しくつくる街区においても、低層部においてはやはり特徴的なタイルを用いて、新しいまちのイメージを創り出していきたいと思いました。「なんばパークス」が竣工しておよそ20年経ちますから、その時の経過を表しつつ「なんばパークス」との関連性を表現したいと考えました。設計チームで議論を重ねながら、現在の楽し気なまちに対して、少しクールなイメージにした方が新しい時代の特徴が出るのではないかということで、それにふさわしいタイルを探していく中で出会ったのが「還元焼成タイル」です。窯内の酸素をできるだけ抑制した状態で焼くことで、偶然性、偶発性のある焼き物独時の味わいとムラのある色のタイルができます。「現代の多様性の時代」にふさわしい表情にチームのみんなが気に入り、今回使用するタイルに決めました。

1 配置計画図

2

3



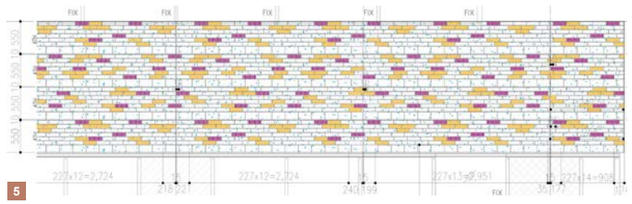
4

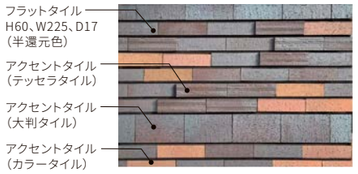
5

1 配置計画図 2 パース図 3 難波中二丁目開発地の俯瞰写真。南海本線沿いで「なんばパークス」の南隣地にあたるA敷地は、超高層タワー「センタラグランドホテル大阪」が入る。B敷地のパークス サウス スクエアはオフィス、店舗、駐車場に、C敷地は「ホテル京阪なんばグランデ」が入り、3敷地を一体的に開発。2025年には大阪・関西万博の開催も予定されていることから、関西経済圏活性化の一翼を担う施設となると期待されている（資料提供：3点とも大成建設）

4 5 大阪の新たなランドマークとなる「センタラグランドホテル大阪」は、タイのセンタラ ホテルズ&リゾーツが日本の第一号店として2023年7月に「なんばパークス サウス」に開業。最上階のルーフトップレストランや、海外で数々の受賞歴のあるスパ・センバリーが出店するなど、アーバンリゾートが楽しめるホテルとなっている

1 2 3 4 LIXILの工場でモックアップをつくり、時間や角度を変えてタイルの見え方をチェックしながら割付を検討していった（資料提供：4点とも大成建設）





5 タイル割付図の例。オレンジ色のタイルは2個ずつまとめて配置しながらも、見え方はランダムに見えるようにしている。自然のまばらさを表現するために、複数の色のタイルを混ぜ、タイルの厚みを変えて凸凹を表現した（資料提供：2点とも大成建設）

タイルのモックアップ製作と工法について

還元焼成タイルとの出会いが、壁面のイメージの軸になったのですね。

丹下氏：実は今回のタイルを採用するにあたって、いろいろな場所やメーカーさんでさまざまなタイルを見せていただきました。そんな中、LIXIL担当営業の原さんに愛知県常滑市の工場を案内された際に還元焼成タイルと出会い、満場一致で方針が決定。その後は表面の粗さ具合や質感など、多種多様なサンプルを見せていただき現在のデザインに決定しました。また、タイルが1色のみだとちょっとクールになりすぎるので、周辺環境との調和を考え、「なんばパークス」や隣接する敷地の色味からサンプリングしたオレンジ色、黄味がかったタイルも混ぜて使うことになりました。

丹下幸太氏
大成建設株式会社
設計本部 建築設計第一部
設計室（渡辺岳）
プロジェクト・アーキテクト

常滑の工場には材料が豊富にあるので、色味や質感の違うタイルをその場でいろいろ試しながらタイル配置を検討しました。日差しの向きが変わると見える色味も変わるので、それぞれの時間帯やタイルの向きを変えて見るなど、現物を使って検討を繰り返し、イメージを高めていく作業でした。割肌などの立体的な検討も重要だったので、工場の方からの意見はとても参考になったと思います。

塩谷氏：LIXILの工場内を歩いていると面白いタイルや珍しいタイルがたくさんあるので、気に入ったタイルを持ってきては、その場で並べて検討することができたのは良かったですね。中野さんが見つけてきた還元焼成タイルは、割肌が筋状になっていることから地層のイメージにつながり、それが共有できたので採用の決め手になりました。3人それぞれの思いや感性をアドリブでぶつけ合い、楽しみながら柔軟に検討できたのが良かったと思います。（笑）

丹下氏：“緑のまちをつくる”というコンセプトがまちづくりのベースにあったので、建物低層部は緑を生やすための「大地」というイメージを共有認識でもっていました。タイル選定のためのデザイン軸がしっかり共有できていたのが良いデザインに繋がったと思います。

塩谷氏：「大地」や「地層」などのイメージから、タイルは横向きにして積層する感じを出し、自然界のばらつきを表すために、いくつかの色味を混ぜ、壁面の凹凸具合はタイルの厚みを変えることで「地層」を表現しようということになりました。

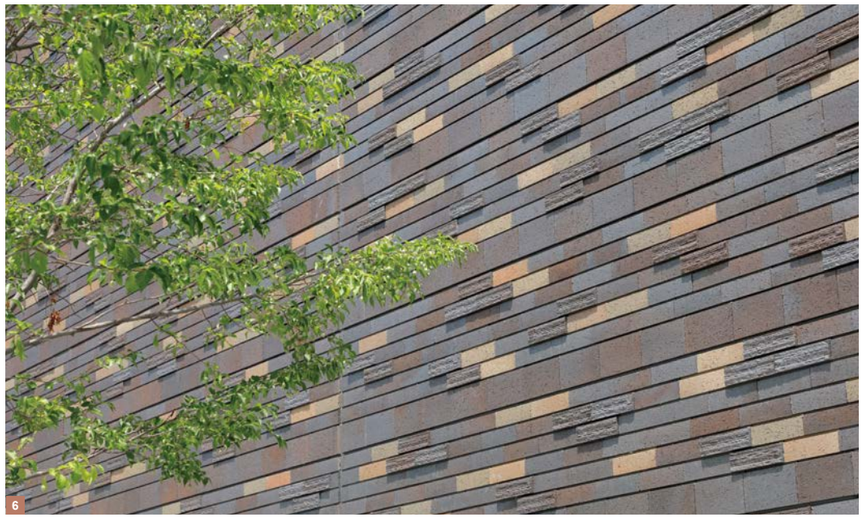
中野氏：タイルは225×72mm、225×137mmの2種類のサイズを使い、押出成形セメント板にタイルを引っ掛けながら施工する外壁乾式タイル張り工法「アスロックタイルハンギングシステム」を採用させていただきました。荒い肌のタイル（テッセラ）や大判のタイルは他のものよりも厚みを増したパターンとすることで、厚みの違いによる陰影もできるので、より地層や大地のイメージに近づけることができました。

中野 弥氏
大成建設株式会社
設計本部 建築設計第一部
設計室（笹井）
シニア・アーキテクト

塩谷氏：「アスロックタイルハンギングシステム」について若干補足しますと、タイルの弱点はなんと言っても剥離です。安全性を考慮して開発されたのがこの方法で、押出成形セメント板「アスロック」のリブにタイルを引っ掛けて固着する工法で、施工性も非常に良く、横のラインがきれいに揃います。そこに焼きムラのある還元焼成タイルの表情が加わり、とても味わい深い壁面になったと思います。タイルの質感と工法がマッチしていますね。

中野氏：タイルは2種類のモジュールがあるので、バランスを見ながらタイルの配置を決めていきました。工場だけでなく現場でモックアップをつくり現地の自然光の中で検討しました。壁面の仕上がりに関しては、最初にできたのが南側のA棟とC棟の間の壁でしたが、当初イメージしていた通りにできたと思っています。

丹下氏：タイルに関しては3敷地共通のデザ



6 クスノキ、ハンノキ、エゴノキ、ヤマザクラ、シラカシなど、施設内に植栽された緑豊かな木々と、大地のような土色のタイルがマッチして、美しい景観を生み出している。樹木の生長とともに街並みが変化するのも楽しみのひとつ

7 樹木と水盤のライトアップやプランター下の照明で周辺の街との連続性を感じさせ、敷地内へ人の流れを自然に誘導している。ホテルのファサードは落ち着きのある明かりで品格を表現した

インとなるので、それぞれの関係者様から同意を得る必要がありました。現地にモックアップを持っていき、周辺環境に合うかどうか確認しながらコンセプトとデザイン意図を説明できたことはとてもよかったですね。ご覧のようにかっこいいタイルなので、どなたからも反論はなく、すんなり皆さまから同意を得ることができました。

塩谷氏：私がひとつ心配だったことは外壁パネルごとに出てくる縦方向のタイル目地でした。これは建物の柱モジュールからで決まってくるものですが、3棟の建物はすべて柱モジュールが異なっているので、統一した寸法での割り方ができません。そのリズムが全体の調和を崩すのではと心配でしたが、丹下さんが面ごとに潔く割っていくという合理的なルールを決めて大胆にやってくれたので、継ぎ目がそれほど気にならず、力強さとして表現できたと思います。タイルの持つ力や凹凸のある張りパターンも良かったのでしょうね。

丹下氏：モックアップで何度も確認していたものの、幅40m、高さ20mの大きな面になったときにどんな見え方をするのか、個人的には最後までひやひやしていました。結果としてはすごくよいものになったと思っています。今回使用した還元焼成タイルは、デザインとしての汎用性がとても高いと感じました。大きな面もそうですが、高さ1.8mぐらいの帯状にした時にもいい見え方をしていたのです。それはなぜかというと、1枚のタイルでも光の当たり具合や見る角度など見る時間によって表情が常に変化し印象が変わってくるなど、タイルそのものに存在感とデザインの深みがあるからだと思います。だからこそ、大きな面で使っても全体としての統一感が生まれる。とても勉強になりました。

中野氏：今回はそうしたタイルの存在感を強調するために、窓まわりのタイルとサッシとの取り合いにはさまざまな工夫をしています。タイルの豊かな表情と工業的なサッシをうまく融合させるために、サッシにフィンを出して、タイルとサッシのエッジが際立つような、端正なディテールにしています。また、建物のコーナー部分もコーナータイルを使わずに、タイルの端を45度でカットしたものを貼り合わせてエッジを効かせるなど、ディテールにこだわっています。そのおかげでガラス面とタイル壁面に緊張感が生まれ、より現代的な雰囲気になったのではないかと思っています。

塩谷氏：重厚なタイルがあまり重く感じないのはそのディテールが効いているのだと思いますね。そういったところで、なんばパークスから20年を経た現代らしい考え方を表現しているわけです。還元焼成タイルの中にツヤのあるタイルが入っていますが、あれが空の光を拾って、重苦しさを和らげてくれました。

タイルの面白さや可能性について

最後に、タイルの可能性について皆さんにお伺いいたします。

塩谷氏：建築の材料がどんどん工業化・規格化して特徴がなくなっていく中で、タイルは工業製品でありながら手作り感が表現できる材料であると思います。例えば、色・質感・形状などの組み合わせは無限大ですから、建物のコンセプトに合わせることができ、素材選択の幅はかなり広いと思います。その意味でも、今後さらに使われ方の可能性が広がっていくのでないでしょうか。

中野氏：今回はLIXILさん以外のタイル工場もいくつか訪ねて、相当勉強させていただきました。その中でタイルに感じたことは表現の幅が広いということです。土から始まり、焼き方、釉薬の違いなど、バリエーションがあり過ぎて迷ってしまうくらいです。だからこそ、どこにもないものつくることができ、オリジナリティが出しやすい。工業製品でありながら、手作り感が出せるという両方の魅力を兼ね備えた素材だとあらためて感じました。今回は、タイルの質感をより感じてもらうよう、サッシまわりのディテールにこだわりましたが、素材がモチベーションになって、新しいディテールを考えるというのも設計の醍醐味だと感じました。

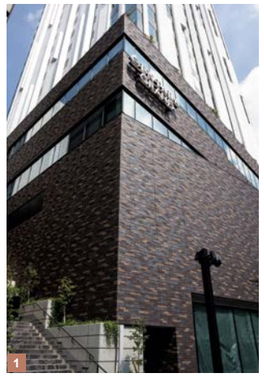
丹下氏：今回タイルを使ってみてあらためて感じたことは、人が触れてみたくなるようなクラフト感、温かみをつくることができる材料だということです。工場でつくり手の皆さんとお話したこと、一緒にいろいろと検討させていただいたことも大きかったと思います。かっこいい建築を目指しましたが、その中に温かい雰囲気をつくれたのはタイルの力だと思っています。

オフィス棟のエントランスホールでは、外壁のイメージを内装にも生かして還元焼成タイルを使いました。ダークな色合いの壁面と真っ白のタイル壁面を対峙させて、温かみがありながら、適度に緊張感のあるエントランス空間を生み出すことができたと思います。同じタイルを使いながらも組み合わせ次第で重くなり過ぎず趣のある空間が創れる。ますますタイルの可能性を感じますね。

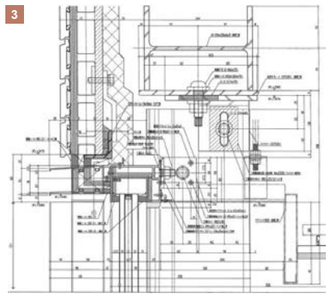
本日は難波中二丁目開発計画の概要とともに、タイルの魅力や可能性についてお話くださりありがとうございました。

DATA
難波中二丁目開発計画

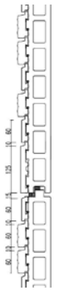
■所在地	大阪府大阪市浪速区難波中二丁目 A敷地：11番50号 B敷地：11番18号 C敷地：11番13号
■施設名称・用途	A敷地：センタラグランドホテル大阪／ホテル（515室）、店舗、駐車場 B敷地：パークス サウス スクエア／オフィス、店舗、駐車場 C敷地：ホテル京阪なんばグランデ／ホテル（227室）、店舗、駐車場
■設計・監理	大成建設株式会社一級建築士事務所／大成建設株式会社工事監理一級建築士事務所
■施工	大成建設株式会社
■敷地面積	A敷地：4,404.72㎡ B敷地：2,505.78㎡ C敷地：2,004.84㎡
■建築面積	A敷地：3,600.82㎡ B敷地：2,179.47㎡ C敷地：1,142.15㎡
■延床面積	A敷地：39,131.08㎡ B敷地：19,685.10㎡ C敷地：9,337.55㎡
■構造	A敷地： 鉄骨造一部CFT造34階 141.56m B敷地：鉄骨14階 58.56m C敷地：鉄骨9階 36.15m
■竣工	A敷地：2023年3月 B敷地：2023年1月 C敷地：2023年1月



1 2 タイルの存在感を強調させるため、サッシにフィンを出し、タイルとサッシの取り合いのエッジが際立つデザインになっている。また、タイル面のコーナー部分では、タイルの端を45度にカットして貼り合わせることで、シャープな角になるよう手間をかけた



3 低層アルミカーテンウォールFIX上部納まり縦断面図



4 5 採用された還元焼成タイルの表面と裏面。手作り感、クラフト感のあるタイルは、シャープな建築に温かみをプラスする素材となった 6 タイルハンギングシステムのATH断面図。板体の最下段に必ず H137のタイルがくるように。また最上段は、板体のシーリングの打ち替えができるようにアイジャクリの先端をカットしている。二丁掛メイン形状は数量が多いので、金型をつくり、他の形状は現場でカットして施工する

7 なんばパークス サウスのオフィス棟エントランスホール。3棟をデザイン的につなぐ低層部外壁に使われた還元焼成タイルのイメージをここでも踏襲し、還元焼成タイルを内装にも使用。ダークな色合いの壁面と白の壁面を対峙させて、緊張感のあるエントランス空間を生み出している